

「洗脳」から、自由になれるのか。

観終わった後にどっと疲れを感じた。首がぱんぱんに張っているのを感じ、緊張していたことに気づく。富山市のオーバード・ホールで3月7～10日に上演されたタニノクロウ脚色・演出の「ダークマスター」。姿が見えない「マスター」の視線を感じ続けた2時間だった。

幕が上がると、夕方のニュースが流れる洋食屋のカウンターにうなだれて座る貧乏揺すりの激しいマスターが現れる。寂れた店内にぼんやりとした西日が差し込む。夜が訪れる前に、安全な家に帰った方がいいと心が危険信号を発する。だが、そこに東京から自分探しの旅に出ていた若者が迷い込み、居座る。そしてマスターは、若者に自分の代わりに料理を作れと提案し、イヤホン型の小型無線機を仕込む。

夜が明けるとマスターの監視と洗脳が始まる。店内中にあるカメラと小型無線機を通じてマスターは姿を見せずに若者に料理の手順を伝える。若者はことあるごとに「マスター？」と小さい子どもが母親の姿を求めるように不安気と呼びかける。マスターは「大丈夫」「お前には才能がある」とポジティブな言葉をかけ続ける。客が美味しそうに料理を食べる姿に、若者は認められる喜びを感じ、一層マスターの言う通りに動くようになる。

まるで幼少期の成長過程を見ているようだった。親や教師に認められたい、褒められたいという純粋な承認欲求により、私たちは社会のルールを覚え、勉強し、努力する尊さを学ぶ。

でも、いつまでもそのままでいいのだろうか。

店が繁盛していく一方で、若者からは本来の無邪気さが消え去る。厨房の壁にもたれてたばこを吹かすたたずまいはマスターそのものだ。口からは「この街を守りたい」という言葉がついて出る。若者を中心としたコミカルなやりとりに客席はつられて笑う。合間に流れる場違いに明るい曲は「これでいいじゃん」と思考力を奪おうとする。でも、私は笑えない。

マスターと若者の関係性は私たちの住む世界のあちこちにはびこる。親の望むルールで生きる子ども、会社に過労死するまで酷使される労働者、配偶者へのDVや子どもへの虐待……。さらには、私たちの好みはビッグデータで着実に蓄積され、インターネットを開けば「これが好きでしょう」というように商品やニュースが提示される。

若者はもうマスターからの洗脳に気づけないのだろうか。私たちは不当な支配関係やIT社会の監視から自由になれるのだろうか。

舞台はこの関係性の先に暴力が生まれること、そしてこの関係性は人を変えながら永遠に再生産されることを予感させて終わる。笑えず、逃げ出したくなるような不安と恐怖を感じ続けた私に、まだ自由になれる可能性があるかと信じたい。

吉田 真梨 (富山県富山市)